

あそこに人間の暮らしがある

——石垣りんの視座——

一 はじめに

石垣りんの第四詩集、そして生前最後の詩集でもある『やさしい言葉』（以下『やさしい』と略記）に、次のような詩がある。

洗剤のある風景

夕暮れの日本海は曇天の下
目いっぱいのがりで
陸地へと押し寄せていた。
列車は北へ向かって走っていた。
ふと速度が落ち

棚 田 輝 嘉

線路脇に建つ家の裏手をかすめる。
台所らしい部屋のあかり
窓際に洗剤が一本
小さな灯台のように立っていた。
大波が来たら家もろとも
たちまちさらわれそうな岸辺に。
何というはるかな景色だったろう
——あそこに人間の暮らしがある。
乳白色のさびしい容器を遠目に
私はその先の旅を続ける。

（一九八二年七月『女性の広場』）

この作品について、粕谷栄一・新井豊美・池井昌樹の鼎

談「人間の暮らしをみつめて——石垣りんと四冊の詩集」¹⁾

の中で、池井は「石垣さんの後ろからもう一人の石垣さんの眼差しが注がれている典型的な例ではないかと思うんです」、「『あそこ』に人間の暮らしがある』と、これはものすごくはるばるした展望ですよ。どこから見ているんだろう、そういう思いにとらわれます。」と述べたのに対し、新井は、洗剤を「小さな灯台」と見、大波にさらわれそうな岸辺に建つ家を見ている石垣には「その守るべき生活がないんだと、自分には昔そういうものがあつたけれど、いまはそれがなくなっているんだ、という寂しさがあるようにわたしは読みました。」と述べている。

石垣は列車の中にいるが、しかし岸辺の家や洗剤を見ている石垣は、そのほか外から現実世界を眺望している、というのが池井の立場であり、それに対して新井は、もっと卑近な感情に根ざしたものであり、石垣はあくまで列車の中から、外部の生活を見、それに対する自分の現在を見つめている、と述べていると解釈できる。

二人の読みの相違は、池井の言う「眼差し」の問題として、興味深いテーマを提示しているように思われる。

つまり石垣が、どこから、何によりものを見ているのか、眼差し人間として、詩人石垣りんはどこにいるのか、というテーマである。

予め、二人の読みに対する論者の立場を述べておけば、新井の解釈に近い。

「あそこ」と石垣が言うとき、今「ここ」にいる自分の存在が対置されており、「あそこ」には行けないという思いがある。「ここ」に対置されるのは「そこ」である。石垣は「ここ」にいる自分の位置から「そこ」を見続け、さらに「そこ」から「ここ」を確認し続けていた詩人だと言つてよい。その石垣が晩年——といっても、この詩集出版後さらに二十年の時を生きているのではあるが——、「ここ」からさらに「あそこ」を「何というはるかな景色だったろう」と思いつつ眺めるとき、「ここ」から遙か離れた生活の場を、「そこ」ではなく「あそこ」と、おのれの位置と切り離して見詰める眼差しが感じられるのである。洗剤は家庭の幸福を照らし出す灯台のように光を放っており、家庭を持たない石垣はそれを「遠目に」「さびしく」「旅を続け」ていく。

こうした解釈の背景にあるのは、それまでの石垣の作品に繰り返し現れている、自分の位置「ここ」に対する強い自己確認と、「ここ」にはない外部への違和感や批判意識である。本稿では、こうした観点から、石垣りんの視座、眼差しの意味とその変遷について述べていきたいと思う。

二 石垣りんの詩業

まず、石垣りんの詩業について、現在読みうる詩集（単行本）を確認しておくことにする。

石垣りん（一九二〇～二〇〇四）は生前に四冊の詩集を出している。

- ① 『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』（一九五九年十二月 書肆ユリイカ）（以下『私』）
- ② 『表札など』（一九六八年十二月 思潮社）（以下『表札』）
- ③ 『略歴』（一九七九年五月 花神社）（以下『略歴』）
- ④ 『やさしい言葉』（一九八四年四月 花神社）

また没後に「未刊詩集の出版という大事をりんさんから託され」た、童話屋の田中和雄が①～④の四冊に未収録の「未刊詩約三五〇編」から「四〇編を選び出版」した、

- ⑤ 『レモンとねずみ』（二〇〇八年四月 童話屋）（以下『レモン』）
- がある。

この他、生前・没後を通じて、石垣りん単独のアンソロジー詩集として、

- *⑥ 『現代詩文庫46 石垣りん詩集』（一九七一年十二月 思潮社）

- *⑦ 『現代の詩人5 石垣りん』（一九八三年九月 中央公論社）

- ⑧ 『空をかついで』（一九九七年一月 童話屋）

- ⑨ 『石垣りん詩集』（一九九八年六月 角川春樹事務所）

- ⑩ 『詩と歩こう6 石垣りん詩集 宇宙の片隅で』（二〇〇四年十二月 理論社）

- ⑪ 『豊かなことば 現代日本の詩⑤ 石垣りん詩集 挨拶―原爆の写真によせて』（二〇〇九年十二月 岩崎書店）

- *⑫ 『永遠の詩⑤ 石垣りん』（二〇一〇年三月 小学館）

- ⑬ 『日本語を味わう名詩入門15 石垣りん』（二〇一三年七月 あすなろ書房）

⑭ 『石垣りん詩集』（二〇一五年十一月 岩波書店）がある。このうち「」を付けたものは、収録編数の違いや重複があるが、①～④には収められなかった「未刊詩（単行詩集未収録詩篇）」を収録しているものである。

この他に

- *⑮ 『現代詩手帖特集版 石垣りん』（二〇〇五年五月 思潮社）

があり、ここにも「石垣りん 詩集未収録詩篇『やさしい言葉』以後」として、未刊詩篇が収められている。

本論文の扱う対象となる詩は以上に収められた作品であ

る。

なお、石垣の没後、石垣家ゆかりの南伊豆町の南伊豆町立図書館内に「石垣りん文学記念室」が設けられ、未刊詩・未刊散文・草稿・スクラップ・手帖、その他の遺品が収蔵されており、特に「未刊詩」については、纏まったものを出版すべく準備中とのことである。

そういう意味では、今なお石垣の全詩業が出版されているわけではないが、今後なされるであろう石垣研究の一端として、本論文を提示したい。本論文では、初出が分かるものは初出を示し、所収単行本名を略称で示す。なお、「石垣りん文学記念室」では、石垣の作品の初出などについて詳細な情報があり、インターネットでも閲覧可能となっている。本稿においても、初出などの情報はこれに拠っている。また、基本的に西暦を使用する。

三 「立場」のある詩

石垣りんは「立場のある詩」⁽³⁾で次のように述べている。

例えば詩を見て虹を感じた、とします。詩は虹のように美しい、さて私も詩を書こう、詩は虹を書くことだと考えてしまう。どうもそうではないらしいのです。虹を書くのは大変です。虹をさし示している指、それ

がどうやら詩であるらしいということ。間違っているかも知れません。私の書く指の向こうには鍋だの釜だのがあるばかりで、それで生活詩などと言われているのですから。

虹を見るとしても、そこに野山や空がなければならぬ。現実、または実際にあるものの向こうに虹は立つ——。自分の詩に欲をいえば、その場所、その時刻と切りはなすことの出来ない、ぬきさしならない詩を書いてみたいと思います。永遠、それは私の力では及ばない問題です。

戦前から民衆詩派の福田正夫の指導を受け、また、勤務先であった日本興業銀行において組合活動に携わりつつ詩を発表してきた石垣りんという詩人が、自分の詩における「立場」について語った文章である。石垣は同じ文章で「私の書いたものが、少しでも世間にとりあげられるきっかけになったのは」「働く者という一つの立場からでした」とも述べている。そうした出発を認めつつも、石垣は、それが自分の詩の本質ではないと言いたいようである。

政治的な「立場」、女性という「立場」、生活者・庶民という「立場」、石垣の「立場」を評する際に必ず出てくる評言を封じるために書かれたように思われるこれらの言葉の中に、石垣りんの詩の本質が隠されている。

同様に、自分の詩が生活を描こうとした詩として評価されることについても、積極的に否定はしないものの、どこかで自分自身としては受け入れがたい思いがあることを繰り返し表明している。

例えば「生活の中の詩」⁽⁴⁾では「私の詩は生活を書こうとしたのじゃない。生活の中から生れちゃったのだ」と言い、生活的という言葉の印象は、どうして何がしかの貧しさにつながるのだろう。芸術的という言葉の感じが、なぜ、あるぜいたくさを連想させるのだろう。もし私がゆたかな生活を詩に書いたら、それは生活をうたった、とは言われなくなるのだろうか？

たとえば生活的、とひとこと言われたって、感じることは言葉と共に、この程度の伸び方はする。けれど、詩にしようと思つて、詩のために生活を考えるゆとりは私にはない。ということとは、やはり貧しさにつながり、貧しさは生活につながってしまう、というわけか？私に言えるのは詩を書く行為が、特別なものではないということ。

と述べている。

他にも「私の詩は（中略）ごく日常の属目にすぎないから、よく生活詩といううわっぱりのようなものを着せられた。私はただ詩を書いたつもりでいるのに、作品は『生活

詩』ということになる」⁽⁵⁾とも言う。

石垣の不満の本質は、自分は自分以外の何者でもないはずなのに、それを特定の「立場」や「〇〇主義」という範疇で括って欲しくない、ということであろう。石垣は自らの「生活」を否定しているわけではないし、そこから詩が生れてくることも否定しているわけではない。ただそれを詩作の根底に横たわる「思想」と見なして分かつた風な理屈づけをするのは、自分の詩の本質と異なる理解の仕方だと言いたいのである。石垣の詩を、ある特定の「立場」に立つて対象を対立するものとみなして「それ」と指し批判している、と読み解くのではなく、なぜ「それ」と指す指を自分は持っているのか、その指はどこから生れてきて、なぜ「それ」を「それ」と指さしているのか、その行為自体の意味を読み取って欲しいと言っているのである。

そう考えてきたときに、石垣が「ここ」と呼ばれる「場所」にいて、「ここ」から語り続けることに徹した詩人であることに気づく。

我々は、いつでも誰でも「ここ」にいる。それしか自分のいる「場所」はない。「ここ」と自分のいる場所を呼ぶならば、他の場所は「そこ」または「あそこ」と呼ぶしかないのであって、特定の思想や政治的指向という「立場」を、敢えて「ここ」に付加する必要は自分の詩にはないのだ、

というのが石垣の一貫した主張なのである。

これに関して興味深いエピソードを石垣は書いている。⁽⁶⁾

「鷹司和子さんは天皇陛下の第三皇女として」「昭和二十五年五月二十日」「鷹司信輔氏の令息、平通氏と結婚した」ときに、石垣は「よろこびの日に」（一九五〇年五月作『銀行員の詩集 昭26』『私』）という作品を発表している。

美しい和子姫

大奥で育てられたあなたは生れながら宮と呼ばれ
くらしのための苦勞も不安もなく

心すこやかに、姿伸びやかに成人された、

（中略）

遠い平安の世にあらず

万々人の殺戮に夫を、兄弟をささげた現世

姫と育つ人の数は

貴族文化咲き栄えた世よりも

まだ稀なあなたの存在である。

（中略）

けれど美しい和子姫

緑濃い宮居の堀を私達日常の貧しい垣の外に築き

生れる子供に着せるものの心配なく

病む人の医薬に不安なく

好き自由に学ぶことの出来る世の中をつくつたら

それはどんなに大きな喜びであろう、

優しい心を包みかくすどんな強がりもなく

すさんだ言葉をつかう者もなく

日本中の女性があなたのように笑うことも出来るに相違ない。

（中略）

ああ五月

このよろこびの日に

貴女のたぐい稀な美しさを

だれが妬み、そねんだりしよう、

美しい和子姫

幸福な人間を見ることが私共のあこがれである

その、より多いことこそ

最も強いあこがれである。

この作品について、「この詩は朗読のために書いたわけではありませんが、職場の文化祭、集会などで朗読させられました」、「語りかけには返事が戻ってきました。この詩を読んだ仲間の一人が申しました」。

「つまり君は、この人たちの幸福はそのままにして、

同時にみんなも幸福になりたいって言うんだな。僕たちは、こういう幸福をひき取りおろそう、と思ってるんだが、君は？」

物事を学問として学んだことのない、働いて、肌で、自分の経験で、人よりおくれればせに覚えてきた私は、その時、何の深い洞察も視野もなく、天皇制に対する明確な判断もなく。であるからレッドパージ前の、激しければ臍首されかねない、きわどい組合の常任委員に、周囲の都合から選び出されたのかもわからないのですが。その人に私が「はい、そうです」と答えたのを覚えています。

と述べている。

石垣は「ここ」と「そこ」の対立において「美しい和子姫」を見ているのではない。「仲間の一人」の言う、「そこ」を否定し「ここ」こそ正しい場所であり、唯一存続を許された場所だ、という主張に対して、「ここ」は「ここ」であり、「そこ」もまた「ここ」になり得る、と言っていると解釈できる。

「緑濃い宮居の堀を私達日常の貧しい垣の外に築き」の「外」とは、いま自分たちのいる「ここ」を排除した場所という意味であろうが、その「垣」を広げて「ここ」もまたその垣の内に入る時代が来れば、私たちもまた「幸福な

人間」になれる、と述べているので、「そこ」を否定し、貧しく虐げられている人間（だけ）の世界を作ろうと言っているのではない。

石垣はさらに、その後の生活の中で、「和子姫」が泥棒によって「ステンレスの菜切り包丁で傷つけられ」た新聞記事や、夫の「平通氏は四十一年一月二十九日、ガス中毒死した」記事にも触れて、

私が若かった日、心をこめて祝った人が、身のまわりにすぐ見つけ出せる戦争未亡人、失業者、肢体不自由者その他多くの不幸な人たちと同じではないにしても、現在客観的にみて幸福とはいえないような状況におかれている、というそのことのなかに私は、目をあてないわけにはゆかないのです。この連帯、このはるかなエニシ。

と述べている。

自分の「ここ」に対する確たる自信があるから、「そこ」を対立の形式では捉えようとしない。「そこ」もまた、その人々にとっては「ここ」であることは確かなのだから、それを「連帯」と呼び「エニシ」と、同じ地平で捉え、「心をこめて祝」うことに躊躇することはない、それが石垣の位置だと言える。読者として石垣の詩の内実を語ろうとするときに、彼女が特定の「立場」に立って対立的に、ある

いは批判的に思想を語っているのではなく、曰く言いがたい、しかし、極めて盤石なある地点に在ることそのものの中から、実感的に詩の言葉が紡ぎ出されていることに着目すべきであろう。

こうした石垣の立ち位置について、水田宗子^⑦は、

石垣りんは、象徴的な言語や表現を排し、生活と仕事の現実を詩作の現場とし、家との拮抗、家族の欺瞞性の奥底に自ら深入りすることで、女の手や足や身体で書く内的リズムの詩、もう一つの日常語としての詩の言葉の世界を切り開いた。そのもう一つの日常語は、裸の生の実体をあばき出す肉声でありながら、それを超えた内面世界の言葉であり、その言葉の世界は、家も社会も、生活も仕事も、家族も個人も、結婚も性も超えた外部、『実存の居場所』を啓示している。

と述べているが、「実存の居場所」という指摘には十分納得させられるものがある。ただ、石垣の「実存」はなにかを超えた「外部」に作り上げられたのではなく、それらの中にこそあった。そうしてそれは、初めから終わりまで揺らぐことはなかった、というのが本稿の立場である。

ところで、石垣の実存としての「ここ」は、揺らぐことなく在り続けたが、その内実に全く変化がなかったわけではない。それについて、次節では『私の前にある鍋とお釜

と燃える火と』を中心に検討しておくことにしたい。

三 広い「ここ」と狭い「ここ」

石垣りんが最初の詩集『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』を書肆ユリイカから出版したのは一九五九年十二月、三十九歳の時だった。詩集の出版を以て詩人の出発と呼ぶならば、かなり遅い出発ということになる。

しかし、石垣は一九三四年高等小学校を卒業するとすぐ、十四歳の時に、実践女学校への進学を勧められていたにもかかわらず、^⑧「私は学校の勉強より、自分の好きなことがしなかったので、まず働き、お金がはいったらそのお金で自分のしたいことをしようと考え」（『いのちの来歴』^⑨）、日本興業銀行に就職する。同時に、小説や詩などの創作にも手を染め、先にも述べたように民衆詩派の福田正夫の指導の下、一九三八年には女性だけの詩誌『断層』に参加するなど、戦時下にあっても旺盛な創作活動をおこなっている。石垣自身も「私は長い間つとめをして、働いて、その間に詩を少し書きました。昭和九年以来きょうまで、といったほうがよいかもしれません。」^⑩と自身の詩歴を語っている。

戦後には組合活動にも参加し、職場の機関誌や同人誌に作品を発表し、年度毎の選詩集『銀行員の詩集』にそれら

の作品が採録されるなど、詩人としての評価はそれなりになされていた。

原爆を扱い、

一九四五年八月六日の朝

一瞬にして死んだ二五万人の人すべて

いま在る

あなたの如く 私の如く

やすらかに 美しく 油断していた。

という詩句で知られる「挨拶——原爆の写真によせて」

（『私』）は、一九五二年八月に書かれ発表されている。石

垣りん三十二歳の時である。

これらは石垣が詩人として若い頃から充分に優れた作品を書いてきたことの証左だが、長期に亘る詩作の中から選ばれた作品を収載した『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』⁽¹⁾は、それ故、収録作品の中で、石垣の立ち位置に違いが見られるという指摘がしばしばなされている。

鈴木志郎康は、

石垣りんの詩を読むとき、この処女詩集の題名にはっきりと現われているような、「女性の立場」に立った、また「生活というものの上」に立った詩、という読み方をする、かなり一面的な読み方しかできないことになってしまう。たしかに、女性の立場から主張

し、生活を素材にした詩が多いが、石垣りんの詩が心の深いところに根ざしていることを見逃してはならない。

この詩集も、前半は働く者の立場に立った主張を述べた詩が多いが、後半になると自分の生活を見詰め、鋭い観察眼で見取ったことを、愛憎こもこもに表現した詩が多くなっている。

確かにこの詩集は前半と後半で趣が異なる。鈴木が言う、前半は「働く者の立場に立った主張を述べた詩」、後半は「自分の生活を見詰め」る詩という整理は妥当なものだと言える。言い換えれば、前半は、石垣個人の〈私〉を超えた、より広い「立場」に立った〈大きな私〉の眼差しから世界を描き、〈わたしたち〉の主張を述べているのに対し、後半は〈私個人〉の場所から〈わたし〉を語る詩へと変化しているということである。

石垣における「ここ」に、こうした変化があったことを軽視してはならないと思う。これはさらに次のようにも言い換えられる。

石垣は詩集の前半において、「ここ」という社会的な立場から「そこ」という社会的な立場」に向かって語りかけているのだ、と。

「雪崩のとき」(『銀行員の詩集 昭27』)では、平和な時
が雪崩のように流され失われる危機を訴え、

私は破れた靴下を繕い

編物などしながら時々手を休め

外を眺めたものだ

そしてほつ、とする

ここにはもう爆弾の炸裂も火の色もない

世界に覇を競う国に住むより

この方が私の生きかたに合っている

と考えたりした。

と書く。「破れた靴下を繕い／編物などしながら」という
言葉は「生活派」の詩人とも呼ばれる石垣の面目躍如たる
表現のように見えるが、しかし、この詩における重要な点
は、その後に出てくる「ここ」が日本＝我が国を指してい
るところにある。

『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』に採録されてい
る最も若い時の作品は「0」(『銀河系』第9号 一九四八
年九月)であるが、そこでは「ぎつしりと充実したこの世
の零よ／0の中で人が生き／人はやがて零になる、／何
ものも持ち得ぬ宇宙のおもさ」と記し、次の「この世の中
にある」(『銀河系』第11号 一九四八年十一月)では、

この世の中にある、たった一つの結び目

あの地平線のはての

あの光の

たつたひとつのむずびめ

あれを解きに

私は生れてきました (この世の中にある)

と記しているが「この世」の「この」が指し示す範囲は広
い。範囲というより「立場」と言うべきかもしれない。自
分のいる位置が、自分一人ではなく、ある立場にある人々
を包含するような広い連帯を意識した場所を「ここ」と呼
ぶという傾向が、この詩集の前半には顕著である。

「人が通るに充分であれば」その「山へ登る」が、もし「こ
こよりはいるべからず」と立札一本立てたとしたら「そ
れはぬきとろう／おそれずに／必ず ぬきとろう」と言う
「祖国」(『銀行員の詩集 昭27』)では、「人が行かないで
誰が行こう！／ここに住む者が行かないで」とあり、「ここ」
は、広く日本全体を想定していると見なせる。

『日記より』(『現代詩』第1巻第5号 一九五四年十一月)
では、「黄変米配給決定」に対して「この国の恥ずべき光
榮を／無力だった国民の名において記憶しよう。」と記す。
「女湯」(『銀行員の詩集 昭33』)では、「公衆浴場」に入っ
ている女たちの姿を描きながら、「これは東京の、とある
町の片隅／庶民のくらしのなかのほかない伝説である。」

と言う。

「無力だった国民」「庶民」という物言いには、石垣りん個人に限定されない大きな立ち位置を読み取ることが可能である。

しかし、この詩集の後半になるに従って、石垣の「手」に変化が生じてきている。

例えば「手」（初出不明）という作品がある。この詩について、先ほど引いた鈴木は、

詩集『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』は三つの部分に分けられていて、この「手」という詩はその第三部から始まる。その第三部の詩は、第一部第二部の詩が組合での活動の立場から書かれたり、社会的な事件をきっかけとしたり、社会に向けられた視点で書かれたりしていたのに対して、作者自身に即したところで書かれている。その一番はじめのところに、この「手」という詩が置かれているのだ。

と述べている。

手

私のひろげた手

私の眼の前に並んだ手

これは生きている

生きてうごいている

この手がいつか老いてゆく

この手がいつかうごかなくなる

（中略）

間違ひもなくこの手

死を約束した私の生の

ありありとかなしい手の表情である

両手を合わせれば不思議にあたたく

これは私のものだ、という

が、やがては失われる

たしかな

しかしあるかない

これこそただひとつの手応えである。

鈴木が読み取っているように、自分の手を見詰める石垣の眼差しは、「これは私のものだ」というように、己れ一人を見ている。それまでの、「立場」に根ざした、私を含む（大きなこ）に在って、人類すべてを象徴するかのよ

うな「手」を描いているわけではない。いずれ死にゆく自分の、「ただひとつの」手を見詰めているのである。

石垣は子供の頃から、死が怖かったとしはしは記している。例えば「出来ること出来ないこと」⁽⁴⁾では

少女のころから、電車などに乗っていても、前にずうつとならんで腰かけている人たちを、一人一人やがてお棺にはいる、そういう風景と重ね合わせてしまう。とにかく死は私にとって強烈な、今もおそろしいものです。

と記している。

死に対する怖れは、『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』以降しばしば登場するが、六十四歳の時に出版された生前最後の詩集『やさしい言葉』には、その思いが多くの作品に込められている。

例えば冒頭の詩は「喜び」（『文藝』一九八〇年二月）と題され、その最終行は「――まだ生きている。」と結ばれている。

「経済」（詩集『地下鉄のオルフェ』一九八一年四月）では「ヒトビトは命数について／いつも足りなくなるときだけ指を折る。／とても貧しく生きてしまう。／とても寂しく死んでしまう。」と書く。

「還暦」（『日本経済新聞』一九八〇年六月十一日）とい

う作品では、少女の日々に幼稚園で「円形に並べられた机のまわりを／歌いながら足踏みしながら／一列になって回りました。／先生ごきげんさようなら／皆さんごきげんさようなら」と別れを告げた思い出を書きつつ、結末でもう一度「先生ごきげんさようなら／皆さんごきげんさようなら」と記しているし、「どうやら私は今日も急いでいるらしい。／あの土の門口に向かって。」と「土の門口」を見据える「道」（『日本経済新聞』一九八〇年六月二十九日）、など、自分の人生とその〈先〉にある死を見詰めている。先に書いたように、石垣はこの詩集の後さらに約二十年を生きたのであるが、五十五歳で定年退職し、当時においては老境とも言える時期において、彼女は確かに死を意識していたと思われる。

同時に、その死が、たった一人に属するものであり、自分は自分個人の死を死ななければならないことも。こうした個人的な問題、個人としての位置が、先に挙げた「手」にすでに表れている。そうして、次の詩集である『表札など』以降の作品のほとんどは「小さなこころ」から見詰められた出来事が描かれることになる。それゆえ、石垣の石垣らしい詩業の重要な部分は、「大きなこころ」にある自分の立場からの詩ではなく、「私個人の小さなこころ」に立ったとき生れてくる詩の中にあるように思われるのである。そ

ここにこそ、石垣の「人間」が描き出されている。

もちろん、初期の活動を否定するものではない。先に引いた「挨拶」(『職組時評』一九五二年八月二十五日)や、「崖はいつも女をまつさかさまにする」の詩句で知られる「崖」(『無限』一九六一年 春季号 『表札』など、「大きなこ」から書かれた優れた作品がある。しかし、彼女の本質はそこにあるのではなく、私一人がいる場所、すなわち「ここ」を何の疑いもなく自分の詩作の視座とする地点から描かれた作品の中にある。

四 「我が家」

石垣りんに対する本格的なそして優れた詩論として、『現代詩文庫46 石垣りん詩集』(既出)に収められた三木卓の「石垣りんの詩」を挙げる事が出来る。三木はここで、前節で述べてきた『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』の前後半の変化に触れ、「集団の融合姓から次第におのれを個へととり戻そうと準備している」姿を見いだし、次の『表札』では「彼女は集団から離脱することによって、自分が平凡な民衆であることを拒否した。」と述べる。さらに「彼女は自分自身の眼で世界を見る、ということ自身を自分自身に失ったものの代わりに得たのである。」とも述べて

いる。

石垣の変貌の内実を語った鋭い指摘だと言えるが、その変化は「集団から離脱することによって」、「失ったものの代わりに」という文脈で語るべきものだろうか。前節で広い「ここ」と狭い「ここ」について述べてきたが、「ここ」の本質的な部分には変化はない、というのが本稿の立場である。ただ、初期においては、「ここ」は狭い——それゆえ本質的な、あるいは実存に根ざした——「ここ」を起点に、やや外側まで拡がっていただけのことなのである。「実存の居場所」に居て、石垣は一步も移動していない。それが石垣りんという詩人を本物と見なしうる根拠だと思う。

石垣は常に同じ場所に立っていた。彼女の初期詩篇の生れた地点は、民衆や労働者、庶民と呼ばれる抽象的かつ現実的な空間であった。彼女はそのままそこに居続けたけれど、彼女の呼びかけが「個」へと向けられたとき、また、彼女の自省の中に、「我が家」という「個」が姿を現したときに、彼女の眼差しは自ずと狭く限定された世界に向けていくことになった、同じ場所にいたままで。

私をとらえて行く手をはばむもの

私の力をその一軒の狭さにとじこめて

消費させるもの

病父は屋根の上に住む

義母は屋根の上に住む

きょうだいもまた屋根の上に住む。

「屋根」「銀行員の詩集昭29」「私」

石垣には家を疎ましく、家族を重荷に感じる作品が多い。右の作品では、「私の力を」「とじこめ」るものとして「その一軒」すなわち我が家を見ている。背後に貧しい生活を強いる「国家」への批判的な眼差しは見出しがたく、「家」への呪詛のようなものにだけ満たされている。自分が今いる「ここ」は、最初は広くあった「ここ」を最奥まで尋ねて行った先にある「ここ」であり、同じ「ここ」と名指されたまま、詩人により本質的な力で繋がってくる。職場で形成された労働者たちの世界と対置されて「その一軒の狭さ」があるのでは、決してない。石垣は同じ場所において、「二軒の狭さ」をより広い「立場」の中に位置づけようとはしない。だからこそ、「家」の物語は、石垣という個人にとって切実で重い問題としてリアリティを持ちうる。

「父母姉弟がひとつ家にかさなつて」（『落花』『星宴』一九五四年七月『私』）、「年老いた父母や弟たちが紙袋の口から／さあ、明日もまた働いてきてくれ／と語りかける。」（『月給袋』『銀行員の詩集 昭32』『私』）、「これは親族という丈夫な紐」（『落語』時期不明『表札』）、「勤め

婦りに「喫茶店で一杯のコーヒーを飲み終えると／その足でごく自然にゆく／とある新築駅の／比較的清潔な手洗所」を唯一の「安楽」の場という「公共」（『詩と批評』一九六七年五月『表札』）等々、家は石垣を現実的に、そうして詩作という表現の場においても束縛するものとして存在している。

本節冒頭に引いた三木卓は「生活―↓家庭といった、現象的な人間生活の枠組みに対する疑問にはじまって、その枠の遙か下部に拡がっている暗黒部分へとむかつて行つた一つの〈眼〉の存在」と述べている。この発言は、石垣の詩が単なる「生活の詩」ではないということを述べる中で、詩の真の内実を「暗黒部分」と呼んだのであるが、石垣の奥底に存在する確固たるものを指し示しているという意味では鋭い指摘だが、それを「暗黒」と呼びうるかどうかには疑問が残る。

石垣がその活動の初めから持っていた一種のユーモアやしたたかさは、自らの根ざす「ここ」から一歩も出てはいない根気強さ、頑固さにある。自らを「鬼ババ」と称する「シジミ」（『新日本文学』一九六三年十二月『表札』）のように、自らを「鬼ババ」と見る石垣は、自分の内にある〈業〉のようなものを感じていたはずである。それは頑固さとしたたかさとも言い換えるものであり、同時に生

活者としての自負でもあったのだと思う。そういう意味では、石垣は「ここ」に在るものを確かに認識していたのであり、「暗黒」という自他共に捉えがたいなにかを連想させるような用語で語るべきものではない。

五 おわりに

石垣りんは自身の詩作について「私の詩は生活を書こうとしたのじゃない。生活の中から生れちゃったのだ」⁽¹⁵⁾と述べていると先に書いた。生活を詩の「場」にしたのではなく、生活の「側」に詩があった。それを「ここ」とごく普通に呼んでいる。今自分がある場所は「ここ」と呼ぶしかないから。

「ここ」から自分自身の生活と繋がらない「遙かな生活」が見えるとき、石垣は「あそこ」と呼ぶのである。本稿の冒頭に引いた「洗剤のある風景」において、石垣は「あそこ」に人間の暮らしがある」と記している。「あそこ」に「人間」の「暮らし」があるのなら、「ここ」にいる石垣りんには「人間の暮らし」がないのだろうか。

四人の母を持った石垣は、特に最後の母親との確執に苦勞しながら、父母兄弟二人の五人家族の生活を一人で支え続けてきた。「私は家族というものの親愛、その美しさが、

時に一人の人間を食いつぶす修羅を思えがく。すがるといふ行為の弱さとすさまじい力。」⁽¹⁶⁾と記している。また、——「昨年定年退職しましたが、送別会果てたあと、親切な上司がつくづく」と「君は半人前だ。どうしてか」といふと、結婚しなかったから。子を生まなかつたら」

結論は、縁がなかったということ。異性をひきつけるだけの魅力がなかったこと。たぶんそれだけです。という「面白半分」の文章を記している。「面白半分」と書いたのは、掲載誌名がそうだからでもあるが、「半分」は「真面目」な決断の結果であって「たぶんそれだけ」ではないということでもある。

次のような発言が石垣にはある。

戦後、私を大切にしてくれていた祖父が亡くなる前、年をとったひとりの女が生きてゆくことをどのように案じるか、たずねました。「お嫁にも行かないで、この先、私がやってゆけると思う?」「ゆけると思うよ」「私は、私で終わらせようと思っているのだけれど」「ああいいだろうよ、人間、そうしあわせなものでもなかった」

(中略)

これからひとりで老年を迎えることがどれだけさみ

しいか試さなければ、といった覚悟のようなものは多少用意したつもりでしたが、実際はどう堪えおこせま
すことか。時には試験管の中に自分を入れ、振ってみ
ます。

「終わらせようと思っている」という強い意志を持って、
石垣は晩年を迎えたはずである。それが自分が選んだ「生
活」である以上、それを不幸とか「半人前」と呼ぶことは
できない。しかし、それにもかかわらず、自分の意思で選
んだ「ここ」と「あそこ」との違いに、晩年の石垣は思い
を馳せたのであろう。「あそこに人間の暮らしがある。」と
記した時、新井が「寂しさ」を読み取ったのは正しい。ど
こか上空の広い視座から庶民の生活を見る、そのような地
点に石垣はいない。「ここ」という自分を選び続けた頑固
な石垣は、「あそこ」にある「人間の生活」を見詰めつつ、
しかし「その先の旅を続ける」ことによって、自分の孤高
の「ここ」を生きる覚悟を語っている。それは人間である
自分自身の生活を否定するものではなかったはずである。
そうでなければ、「ここ」から始まった石垣の詩のすべて
が否定されることになってしまう。そうではない詩が、確
かにここに残されている。

注

(1) 『現代詩手帖特集版 石垣りん』二〇〇五年五月 思潮社

(2) これらの詩集のうち①～④は復刊という形で何種類か再刊されている。以下、本論文で使用したものを挙げておく。

『私』…石垣りん詩集 私の前にある鍋とお釜と燃える火と (二〇〇〇年一〇月 童話屋)

『表札』…『石垣りん文庫2 詩集表札など』(一九八九年五月 花神社)

『略歴』…初出本を使用

『やさしい』…『石垣りん詩集 やさしい言葉』(二〇〇二年六月 童話屋)

(3) 『詩の本・Ⅱ』一九六七年十一月 筑摩書房 (石垣りん『ユーモアの鎖国』一九七三年二月 北洋社 所収)

(4) 『芸術生活』一九六九年六月 (同3所収)

(5) 『生活と詩』(『文化評論』一九七二年九月) (同3所収)

(6) 『事実とふれ合ったとき』(飯塚書店『詩作ノート』一九六八年十一月) (同3所収)

(7) 『表札』をかけた崖の上の家 ——石垣りんの詩に寄せて (同1所収)

(8) 茨木のり子『弔辞』(同1所収)

- (9) 石垣りん編『詩のおくりもの 家庭の詩』(一九八一年十一月 筑摩書房)
- (10) 「顧みて、いま―戦後三十年」『東京新聞』昭49・8・2
 〜5(『焰に手をかざして』一九八〇年三月 筑摩書房)
- (一九九二年九月 同 ちくま文庫 による)
- (11) 所収されている作品のうちで最も早い作品は、明らかに
 なっている範囲では「0」の一九四八年九月、遅いもの
 は「その夜」の一九五九年である。
- (12) (13) 「鑑賞」〔現代の詩人5 石垣りん〕一九八三年九
 月 中央公論社)
- (14) 『詩をどう書くか』一九七〇年六月 社会思想社(同3
 所収)
- (15) 同4
- (16) 「夜の海」一九七三年七月『婦人公論』(同10所収)
- (17) 「私はなぜ結婚しないか」〔面白半分』一九七六年三月
 (同10所収)
- (18) 「試験管に入れて」 共同通信・「河北日報」ほか
 一九七一年十一月三十日(同3所収)

(たなだ てるよし・実践女子大学教授)